

## 病名目録と私(2)

梶原敏宏

### 第2・3巻の印刷と50周年記念事業

病名目録第1巻の初版は以上のようにして昭和35年12月に、不満足な出来栄えだったが、どうにか印刷発行することが出来た。ほっとしたのも束の間、野菜・草花、果樹・林木を続いて印刷することになっていた。しかし庶務幹事長の職務と重なり、印刷のための原稿整理は急速な進展を見ないまま、37年度の大会を迎え、2年間の庶務幹事長の重任を終わり小室康雄氏に幹事長の役を引き継いだ。これと前後して私は麦類黄さび病のraceの研究を進めるため、西ドイツのBraunschweigにある連邦農林生物研究所と接触していた。幸い西ドイツのフンボルト財団の奨学金を得て1年間連邦農林生物研究所に滞在してraceの研究をすることになり、後続の病名目録の編集作業も小室さんをお願いして、37年8月末から西ドイツに出かけた。

この間、編集・印刷は相当進んでいるだろうと想像していたが、1年経過して帰国してみると、作業は殆ど進展せず、私が帰国したら再度編集を担当してもらい、そして第2巻(野菜・草花)および第3巻(果樹・林木)を一括して、日本植物病理学会の50周年記念事業の一環として印刷し、配布するというになっていた。

俗に云う欠席裁判とはこのことかも知れない。全部印刷ということになると大変な仕事で容易でないと考えたが、1年間外国で自由にさせて頂いたこともあり、引き受けて再び編集業務を開始した。50周年記念の大会は昭和40年4月に開催が決定していたので記念事業の一環として印刷するのであれば、40年3月には全部印刷発行しなければならない。とすると仕上げるまで1年6ヶ月の余裕しかない。殆どのことを捨て去り編集に専念する毎日になった。幸い集った原稿は、第1巻のときと違って趣旨に沿って吟味されており、編集の手順も第1巻のときの経験を生かし比較的スムーズに進行した。それでも未調整の事項が残り、何度か編集委員会を召集し対応策を協議、編集幹事で手分けして処理し何とか予定通り発行出来た。出来栄えも第1巻より数段勝り、

ほぼ満足できる状態であった。しかし、出典については全部チェックする余裕はなく、学名の出典は殆どチェックせず原稿の通りで印刷された。

### 病名調査委員の常設と委員長就任、そしてその後

50周年記念事業も無事終わり、ようやく病名目録から開放されたと思い、残務整理をしながら本来の研究に専念していた。ところが、50周年記念大会の翌々年の昭和42年度大会で当時の明日山会長から、発表された新病害について検討、必要に応じて病原も調査し病名目録の補遺、新病害の登録の役割を果たすことを目的として、病名調査委員を常設したい。委員長には梶原を当てたいということが突如として提案され、可決された。委員は大会終了後、会長と相談して選任した。また、委員のほかに9名の権威者を顧問にお願いし、公式に種々ご意見・ご助言を頂けるようにした(日植病報33(3):204, 1967)。設置された病名調査委の最初の仕事は、病名目録第1巻~第3巻初版の編集経過を整理して今後のために、学会として病名整理基準を設定することにした。その結果、学会報34(4):307~308, 1968の本会記事に示した基準が策定された。昭和43年以降は病名調査委員会の設置の目的にしたがって、新病害について調査検討を行いながら、病名目録第1巻の改訂の準備を逐次進めた。しかし50周年記念を前にして編集した緊迫感はなく、多少のんびりした感じがあったことや、私が所属していた農技研の筑波移転の対応もあり、第1巻の改訂作業はそれほど進まないまま4年を経過した。昭和47年からは移転本部長に選ばれ、病名目録の改訂に従事する時間もない状態であった。

さらに、昭和48年から国際協力事業団(当時OTCA, 現JICA)の派遣職員としてインドネシアに長期(2年間)派遣されたこともあって、病名調査委員長の任を果たすことは出来なくなり退任した。病名目録第1巻の改訂の取纏め役は稲葉忠典氏に託し、西原夏樹氏の献身的な協力もあって、昭和50年に刊行することが出来た。私はJICA派遣職員の任を終えてインドネシアから昭和50年3月に帰国したが、昭和52年には熱帯農業研究センターに配置換えになり、以後病名目録の編集には関与しなくなった。

## 編集の回顧—叱られた話

以上のように、昭和33年から15年間病名目録の編集に係わり、その間多大の時間を費やし、自身の研究に対してマイナスの要因となったことは否めないが、作物病害の全体像をつかむには大いに役立った。また多数の先生方に直接接する機会に恵まれ、親しくご指導、ご助言を頂くなど、何かにつけ可愛がって頂いたことは幸いであった。

反面、編集作業の過程で、お叱りを受け暗い気持ちになったこともあった。その一つは恩師吉井先生から大変お叱りを受けた。それはイネ心枯線虫病の病名の件である。細菌や線虫による病害は、〇〇〇細菌病、〇〇〇線虫病と統一することに委員会で話が決まり、私の手元に届いた原稿では心枯線虫病となっていた。この病気は、吉井先生がホタルイモチなどと呼ばれていた原因不明の症状を示す稲について研究され、それが線虫による病害であることを明らかにされ、線虫心枯病と名付けられた。その後発生生態などの詳細な研究成果に対し日本農学会賞が授与されている。病名目録では統一的に病名を改めるといふことは、吉井先生には当然のこと事前に話がされ了解されていると思い、私からはとくに連絡をせず印刷発行された。ところが吉井先生はこのことをご存知でなかったらしく、「何の断りもなしに勝手に病名を変更するとは何事だ」と大目玉を頂いた。私はこれに対して、統一的に病名を変更することはご承知で、既に了解されていると思って処理した旨返事をしたが、そんな話は聞いていないと大変な剣幕だった。先生が心血を注いで研究・命名された病害なので、確かに申し訳ないと思いますが、大先生方の中にはご自分の著書で何の断りもなく変更されていることも屡ある。したがって、統一的に変更することに一つ一つ了解を得るなどという余裕は全くありません、この点ご了解頂きたいと申し上げた。このことについて後に「君は政治家だな」と皮肉と共に了解して下さったことが今でも忘れられない。

今では殆どないと思うが、古くは病名について厳格に考える方と、若干場渡り的に病名をつけ、次の段階でその理由も述べず気軽に変更される方とおられた。吉井先生は前者であったために、何の断りもなく勝手に変更するとは、言語道断であったのだろう。

また、当時林業試験場の部長であった樹病の大家、伊藤一雄さんにも叱られた。確か昭和34年の2月はじめ雪の降る日だったと記憶している。病名目録の編集で、特用作物クスの病害に、くもの巢病(大粒白絹病、白絹病)、白絹病(丸白絹病)、小粒白絹病、白葉枯病

(*Corticium cinnamomi*)と菌核を作る病害が4あげられており、その区別と病原菌との関係が判然としない点があったので、原稿を書かれた伊藤さんに電話で伺った。当方の具体的な質問の内容は忘れてしまったが、結構根掘り葉掘り聞いたこともあり、また伊藤さんの虫の居所が悪かったのか「あんたそんな細かいことまで電話で聞くなど失礼千万だ、こちらまで出向いて来て聞け」と大変な剣幕だった。当方申し訳ありませんでしたと電話を切ったものの、何を叱られたのか、何故叱られなければならなかったのか理解できず、傍におられた岩田さんに、何で叱られなければならないのか割に合わないと思痴をこぼしたこともあった。ただ、このことがあって以来、私が九大の後輩であったこともあり、色々ご指導を頂き何かにつけて可愛がって頂いた。

この他、当時農技研の室長であった後藤和夫さんにもお小言を頂いた。「梶原君、学会のことにあまりのめり込むな、適当にやっておけばよい」と。後藤さんのお小言は自分自身の研究をしっかりとやれという忠告だったと受け止めたが、まことに後味の悪いお小言で、今でも忘れることはできない。

## おわりに

確かに、今振り返って見ると、よくこれだけのものが編集できたのだと自分自身でも感心する。編集委員・幹事の皆さんの貢献はもちろんだが、周りの方々、とくに農技研病理科の諸氏の多大の協力も忘れられない。当時は今と違ってパソコンがなく、原稿の整理は皆手書きである。病原の索引作りなどは、一つ一つ書き抜き、それを並べて編集しなければならず、短時間のうちに莫大な量の処理には多くの人の協力を必要とした。この他編集に当たっても何かとご支援を頂いたが、このような協力がなければ、病名目録の編集・出版の事業はなしえなかったのではないだろうか。改めて感謝の意を表したい。

私自身の研究面では時間的にも大きな損失となったが、この編集作業によって、幅広く多くの病害についての情報が得られ、昭和36年8月、北島博さんと共著で出版した原色作物病害図説の執筆・編集にも大いに役立った。また、この作業を契機に、北から南まで日本国中の大先生に親しく接することができるようになり、その後数多くの貴重なご助言を頂き、円滑に研究活動を進めることが出来た。そして、大きなトラブルもなく、農水省における研究生活を終え、引き続いた日本植物防疫協会での大役も果たすことが出来たように思われ、貴重な経験になったと心から感謝している今日である。

2009.10.31. 記述